博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	森　由利亜
論　文　題　目	全真教の継承と正統性の再発見 ――明末から道光年間初期の龍門派門徒と蒋予蒲の呂祖扶乩信仰を中心に

審査要旨

全真教龍門派は、元朝の丘処機（長春）を祖師とする道教の一派であり、清朝全真教では最大の規模を持った。明末以前の長春真人仙派では、丘祖の嫡派であることの明証は派詩による法名という一点にあり、伝えられる法の内容は問題にならなかった。しかしかかる龍門派門徒の中から、丘処機の内丹法の秘伝を伝えるとする伍守陽や、朱元育、潘静観、丘処機以来の戒が伝えられていると主張する閔一得らが出現するようになる。ただ清初の王常月はそれとは異なる性格を持つ。

著者はまず第一部で、この王常月を取り上げる。彼は閔一得によって「龍門正宗」の正統性を支える支柱として祭り上げられたが、むしろ明代に行われていた出家戒である「初真十戒」を復興し、新時代の道教に秩序をもたらそうとした道士であったと著者はする。このような人物が、次第に丘処機以来の戒律を伝える道士として伝説化してゆく過程を本論文では論じている。王常月を清朝における全真教中興の祖とするのは後世の創作であるという説が提出されているが、著者はそれに対して王常月が全真教で果たした重要な役割を解明する。王常月は康熙年間において金陵の隠仙庵を重要な拠点としながらも、同時に江浙の間、武当山で積極的に律師として活動していたことを証明し、また王常月の北京白雲観伝戒を明確に述べる『初真戒律』の後世偽託説については、1686 年頃に呉太一を含む王常月の弟子たちによって編集されたとする。王常月が道士に三壇戒を授与したことの否定論に対しては、実際に行われていたか、あるいはその構想は存在していたとする。著者はそこで仏教側の動きを視野に入れることで、清初に金陵で活動した見月読体と、江南で活動し彼の先蹤をなした漢月法蔵を検討し、王常月が江南に至って金陵仏教の戒律改革の刺激を受け、初真戒に更に二層を加えた三壇戒の構想を育んでいった経緯を明らかにする。更に著者は三壇戒の最初の戒である「初真戒」について、唐代前半には「初真十戒」が行われたが唐末以降は廃れ、周思得や王常月が用いた出家戒は共に近世の「初真十戒」で、王常月による戒律復興とは基本的には明代に行われていた出家伝戒を復興、継承する側面があるものとする。ただ王常月の場合は、戒を復興する使命感はあったものの、それを龍門派固有のものとして強調はしない点にも注意する。続いて著者は、王常月が金陵で行ったとされる伝戒説法に関する『龍門心法』や『碧苑壇経』の中の王常月像と、本来の像との違いを考察する。そして丘処機の戒律継承の意識自体は『龍門心法』、『碧苑壇經』双方の王常月像に共通するものといえるが、『龍門心法』においてはそれと同時に三清・玉皇の門下としての面も強調されていたのに対し、『碧苑壇經』ではこの部分を削除することで、王常月をより全真道士らしいイメージに収斂させようとしているとする。

第二部では、まず明末の著名な内丹家である伍守陽の『天仙正理直論』、『丹道九篇』、『仙仏合宗語録』の三書の相互関係について考察し、『天仙正理直論』を補完するために作られた『丹道九篇』と、清代康熙年間の内丹家の師弟である朱元育と潘静観が刊行した「邱祖語録」が共に龍門派に属する修行者の手になり、龍門派に伝わる丘処機の秘伝の内容を明らかにした書として位置づけられているが、両書とも後世の制作あるいは彼等自身が創作した可能性があり、そのことから、明末から清代初中期にかけて、龍門派のなかに単に丘処機の法系継承の意識のもとに修行するだけでなく、自分なりの伝承の内容を創造し、正統的伝統継承を主張する傾向が顕著になったとする。そして、伍守陽と彼の師弟たちが在家修行者であり、世俗社会のなかで内丹を学ぶ人間関係を構築したこと、また儒者や浄明道信奉者などの世俗の全真以外の教えを奉じる人々もその輪の中に加わっていることを確認する。伍守陽の内丹法については、その修行体系の中に点在する特殊な経験を祖師丘処機と関連づけ、その経験が丘処機の経験を追体験することにほかならなかったことを示す。著者は更に伍守陽の秘術を支える重要な要素のひとつである「真意」について検討し、伍守陽は、それまでに展開してきた「真意」の諸局面を消化しつつ、更にその上に、「神」「気」合一の原理に根ざした内丹法の全体的な統括という機能を加えたとする。かかる統括する「真意」の内実を見てみると、それは「返照内観」に象徴さ

れる無念、無為の境地を基盤とするものであり、伍守陽の読者であり教導の対象でもあった明末江南の在家の読書人たちにとっては、内丹法自体を簡易に見せる効果があり、その心境がいかなるものかの案内の役割を果たしたと言う。次に全真教龍門派下弟子を名乗る朱元育によって伝えられた丘処機の語録の体裁をとっている「邱祖語録」について検討し、丘処機の真正の語録とは言い難いこと、「邱祖語録」の発行主体が清朝康熙年間、十七世紀後半に毘陵すなわち常州で活動していた朱元育、潘静観、荘惺菴を中核とする全真教龍門派のグループであることを明らかにする。また「邱祖語録」における「回光」が、在俗の道家信徒が行う比較的簡易な術でありながら、龍門派の「真訣」とされる意味を考察する。

第三部では、まず『太乙金華宗旨』を取り上げ、原本『金華宗旨』が純然たる扶乩の書であること、浄明道、全真教、天仙派を自称する各乩壇結社は本書を奪い合い、この著作の呂祖の教説がそれぞれの正統性を保証するものであったとする。彼等は対立する一方で、呂祖扶乩信仰という同一の信仰を共有していたのである。次に清朝の官僚であり熱心な呂祖扶乩信仰の実践者である蔣予蒲が、彼等の乩壇で『道蔵輯要』と彼等の『呂祖全書』である『全書正宗』を扶乩によって生成してゆく状況を明らかにする。そしてそこに士大夫の立場から道教の伝統を解釈・構築する行為とその方法の一例が示されていることを指摘する。覚源壇の呂祖信徒たちは、自分たちを「天仙派」に位置づけた。この覚源壇の主神は呂祖であるが、二祖とされる柳守元も覚源壇の乩書に多くの序跋を残しており、蔣予蒲たちの乩壇の特色を成す重要な神格である。著者は従来ほとんど研究がされてこなかったこの柳守元について考究している。著者はまた蔣予蒲の呂祖乩壇の成員と関係者について可能な限りの特定を行い、彼等には『四庫全書』の編纂官および河臣の紐帯によるエリートたちのネットワークがあったこと、派としては金丹道の正統を自認していること、全真教からは自立した『呂祖全書』の伝統を色濃く継承すること等を明らかにする。次に著者は『道蔵輯要』が覚源壇で編まれたものであり、『全書正宗』の成果の内容を基本としていることを証し、『道蔵輯要』における蔣予蒲編纂の痕跡を追求する。そもそも蔣予蒲自身は道士ではなく、僧から五戒を授かっており、また進士及第のエリート官僚である。そこで彼の道教や仏教に対する接近は、あくまで士大夫としての見識が許す範囲で行われたと見、その蔣予蒲に『道蔵』への接近の足場を提供しているのが呂祖信仰であり内丹法である点に注目する。蔣予蒲等は、全真教が南北宗に分派し一元的な道から乖離していることを批判し、この乖離を南北両宗の祖師でありなおかつ彼等天仙派の初祖である呂祖によって一つに収斂させ、道の一元性を回復することを使命としていたとする。この図式が道教全体へと適用される時、それは蔣予蒲等が『道蔵輯要』を編纂した企図そのものに重なることになる。著者は最後に『道門功課』を取り上げ、本書が蔣予蒲の乩壇で作成された全真教の科儀書であることを明らかにし、蔣予蒲等が本書を介してどのように全真教に関与しようとしたかを検討する。彼等は、天仙派という呂祖扶乩信仰の信徒として、呂祖の乩壇で全真教の功課を作ったのである。著者は、彼等の行動は、譬えるなら、あたかも覚源壇という天仙派のプラットフォームから全真教という列車に乗り込むような行動のようなものとする。

近世に盛行した道教教派が再生されていく様相と、それを支えた正統意識の様々なあり方を実証的多角的に研究した論文で、今まで輪郭がぼやけていた全真教の全体的把握に資する研究成果として高く評価できる。また在家の一般士大夫がいかに全真教に関わっていたのかも具体的刺激的に描き、近世社会の中における宗教の役割に新たな展望を開いている。なお公開審査会では、度牒の問題、伍守陽と『大丹直旨』の関係や彼の内丹思想の由来などについての質問が出たことを付記しておく。総じて、多くの基礎資料を丹念に読み解き、従来の研究の蓄積も消化したうえで、全体的な見取り図を示すとともに新たな知見を随所に提出していて、学界に大きく貢献する研究と言えよう。

以上から、本論文が博士学位の授与にふさわしいものであると判断する。

公開審査会開催日	2020 年　3 月 30 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	土田　健次郎	中国近世思想・日本近世思想	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	渡邉　義浩	中国古代思想	文学博士（筑波大学）
審査委員	東京大学大学院人文社会系研究科・教授	横手　裕	中国道教史	
審査委員	明治大学文学部・教授	垣内　景子	中国近世思想	博士（早稲田大学）